

上杉和央 著

『歴史は景観から読み解ける はじめての歴史地理学』

ベレ出版 2020年10月 213頁 1,700円+税

本書は、景観や地域の個性を読み解く歴史地理学的アプローチを紹介する入門書である。「はじめての歴史地理学」という副題が示すとおり、歴史地理学に初めて接する読者に向けて、豊富な事例を通じてノウハウを伝えるスタイルをとっている。また、本書の後半では文化的景観を巡る近年の動向について、著者が調査や検討に携わった事例に基づいて紹介している。本書の大きな特徴は、入門書というスタイルでありながら、著者の豊富な研究成果に支えられた充実した内容を持つ点にある。専門的な成果を平易な言葉をもって広く伝えることは、実に高い技術を要する。それを実践した本書の構成は、以下のとおりである。

はじめに

第1章 歴史と地理の交差点

コラム1 昔ばなしの語るもの

第2章 歴史の道をたどる

コラム2 唱歌から浮かぶ日本の風景

第3章 道を比較してみる一銀を運ぶ二つのルート

コラム3 羽衣伝説と松

第4章 観光名所の歴史地理を探る

コラム4 「景観」と「風景」の違いとは？

第5章 「景観」の誕生—文化的景観とは何か？

コラム5 アンドリューズ夫妻の世界から

第6章 自然と暮らしが生む文化的景観を読み解く

コラム6 四季のイメージ

第7章 景観の変遷を読み解く

コラム7 五感で感じる景観

第8章 山村景観から地域の歴史と個性を読み解く

コラム8 場所の記憶を伝える

おわりに

まず、著者は、本書の冒頭で歴史地理学を『歴史』と『地理』の交差点に立ち、全体を見渡す学問』と紹介する(4頁)。そして、「歴史と地

理の交差点』と題した第1章で、香川県高松市の高松駅近くに位置する1つの交差点を取り上げる。この交差点は、著者が高校時代に通った通学路にあったもので、著者にとって「まったく特別などころはない普通の風景」であった(12頁)。しかし、著者は、そのどこにでもありそうな風景に、ほかには無い特徴があると説く。読者は、この交差点を通じて、「歴史」と「地理」の交差点で全体を見渡す学問の世界に立つ。極めて明快な導入である。続いて、著者は、この交差点に疑問を呈する。高松市の中心部は戦国時代に生駒氏が作った城下町をベースとして展開していて、当時、街路整備がなされたため現在も交差点の多くは整然とした十字路になっている。そのなかで、冒頭の交差点は変則的な五差路である。その理由はなぜか。著者は、交差点が中世の河道と微高地の境界であったことを明らかにしたうえで、交差点の成り立ちを中世から現在まで貫く視点から解説する。この章で、著者は読者に対して読者自身が普段の生活で通っている交差点を思い出すよう促す(14頁)。このように、本書では、読者に呼び掛けるスタイルが徹底されている。

続く第2章では、日本遺産の1つである兵庫県「銀の馬車道」を事例にして、歴史地理学の道具を紹介する。銀の馬車道は、兵庫県の生野鉱山で産出された銀や銅を姫路の飾磨港へ運ぶために造られ、明治9(1876)年にほぼ完成した。最新の舗装技術を取り入れた日本初の西洋式道路であったが、明治28(1895)年に播但鉄道が全通したため、主役の座にあったのは20年足らずであった。著者は、地元自治体の神河町教育委員会と踏査をおこなった際の経験から、事前調査の資料として利用する近代の地籍図と地形図について説明する。また、踏査で用いる現在の地図と、その入手方法を紹介する。対象地域の自治体が詳細な地図を頒布している場合があること、集落がある地域では住宅地図が有益であり、書店やウェブサイトで購入できるほか、地域の公共図書館に備えられている場合が多いこと、ただし、住宅地図の複写には制限があることといった情報は、歴史地理学を専門とする研究者にとっては自明であるが、本書の主たる対象の初学者にとっては重要なノウハウである。地図といえば画面に映し出されたデジタル地図が真っ先に想起される現代社会におい

て、紙媒体の地図を「リアルに」手にする機会は減っている。紙から画面へ、その移り変わりを意識し、読者に必要な情報を提供する。根底にあるのは、何が自明で、何がそうでないかを的確に判断する感覚である。さらに、著者は踏査の道具を紹介する。一般的な調査の場合は、地図を挟む画板、野帳、カメラがあれば十分として読者が踏査に出掛けるハードルを下げると同時に、中級者以上向きとしてGPSロガー等を挙げ、読者のレベルに応じた情報を提供している。そのうえで、実際に著者らが銀の馬車道を踏査した結果、道路下の側面に残された石積みの基礎や、道路設計時の道幅と一致する橋といった往時の痕跡を見出した成果を示す。ここで著者は、これらの痕跡は「見ようとしないと見えてこない」と強調する(45頁)。そして、個々の構成要素を丁寧にとらえることが、景観全体の理解を深めると指摘する。

第3章では、ユネスコの世界遺産に登録された石見銀山の「銀の道」を取り上げる。前章から鉱山と道という観点を引き継ぎ、読者がスムーズに読み進められるような事例の選択がなされている。事例は類似するが、本章では、道の比較を通じて景観や地域の特徴をとらえることに主眼を置く。つまり、読者は、個々の地域に留まらず、複数の地域をとらえるという新しい視点を習得する。比較するのは、石見銀山の銀を日本海側へ運ぶ2つのルート、すなわち温泉津沖泊道と軻ヶ浦道である。2つのルートを比較する前に、基本事項として前章の銀の馬車道との相違点を示し読者の注意を促す。銀の馬車道は馬車を通すため西洋式の舗装を施した起伏の少ない道である一方、石見銀山の2つの銀の道は、人が歩く未舗装の起伏が大きい道である。また、70km以上ある前者に比べ、後者は10km程度と短い。さらに、日本海への距離、鉱山の標高、良港の立地といった条件を挙げ、石見銀山を他地域の鉱山と比較する。そのうえで、著者が大学院生と踏査した際の実例をもって2ルートを比較し、結果として温泉津沖泊道は約12kmと距離は長いが約7kmの軻ヶ浦道よりも楽であった指摘する。理由は峠の数にあるとして、ルートの断面図を示して前者の峠は1つ、後者は2つあることを確認する。その際、断面図の作成に国土地理院の「地理院地図」が便利であるとして、ノウハウの紹介を欠かさない。ま

た、道の利用のしやすさだけで搬出港が決まったのではなく、気象条件、海象条件、坑道や精錬所の位置、鉱山を支配する権力者のマネジメントの仕方といった要因を挙げる。読者が、地形の条件という分かりやすさだけで安易に地域の特徴を理解する事態に陥らないよう注意を喚起する点は重要である。鉱山と港を結ぶルートを踏査した著者らは、あわせて山と海をつなぐ道を歩くなかで、地域住民に生活のなかでいかに道が利用されていたのかを尋ねた。地域住民の生活に即して地域の実態を理解するフィールドワークの方法を示し、「地域全体のなかの多様で動的な流れ」をとらえ、歴史的な価値を理解する姿勢を伝える(65頁)。また、住民が利用しなくなり通行困難となった道の写真を掲載し、道は「人や物、情報が行き交ってはじめて維持される」と指摘する(同頁)。主張を明確に表現する写真は、本書の魅力である。

ここまで交差点や道を通じて歴史地理学の方法を伝えてきた著者は、続く第4章で日本三景のひとつである天橋立を事例に取り上げる。まず、多くの人が知っているこの観光名所には、天橋立それ自体のほかにも面白い歴史地理があると読者に呼び掛ける。著者は、天橋立の付け根(北側)に位置する宮津市府中地区に注目し、丹後国府を事例として歴史地理学における国府研究の研究史を紹介する。当初、国府は方形方格の都市プランを備えるという理解から、丹後国府は府中地区より西に位置する男山地区に比定されていた。しかし、その後の研究で「市街不連続・機能結節型」の概念・イメージが提示され、近年では発掘成果から府中地区が脚光を浴びるようになったと紹介する。加えて、発掘調査以外にも過去の景観を推測する手掛かりがあるとして、現在の景観から過去の景観を復原しようとする方法を提示する。そして、国府の諸機能を結びつける道路に注目し、地図や写真から古代丹後国府の中軸線として機能した道路を見出す。その手法は、前章までに紹介されてきた方法そのものである。さらに、成相寺参詣曼荼羅や雪舟の天橋立図といった絵画資料から、中世の府中地区が宗教都市、門前町として機能していたことを指摘する。

続くコラム4は、「景観」と「風景」の違いを解説するもので、本書後半の導入となっている。

筆者は、既にここまでのコラムで昔話や伝説、唱歌を通じて景観イメージや風景観について言及し、景観の読み解きにはステレオタイプからの脱却が必要であると説いている。さらに、本コラムではカナレットやセザンヌの絵画作品を挙げながら、「共感できる側面が多いと風景、共有できる側面が多いと景観」と説明する(95頁)。風景と景観、共感と共有の意味は共通するところが大きいとしたうえで、平易な言葉を用いてその微妙な違いを読者に伝えている。

第5章以降は、文化的景観に関する話題に重点を置く。2005年、景観法の施行とともに、文化財保護法の改正により文化的景観という新しい文化財のカテゴリーが誕生した。著者は、法律上の言葉として風景ではなく景観が採用されたのは、法律が共感よりも共有を指向するためであるとして、先のコラムで掲げた定義を用いて説明する。さらに、著者は景観という言葉の歴史を振り返る。景観という言葉は、植物学者の三好学が1900年代に使い始め、一般的には「ながめ」という意味で広まった。一方、1920年代以降に地理学の間でラントシャフト論が高まり、辻村太郎がその訳語として景観を「眼に映ずる景色の特性」と定義して影響力を持った、という過程を紹介する。著者は、辻村らを「見た目派」、小牧実繁らを「まとまり派」と便宜的に呼び、氷山の例えで両者のとらえ方を説明する。この例えによって、学史に馴染みのない読者も両者の違いが明確に理解されるであろう。しかし、著者は、実際に両者はきれいに分かれていたのではなく、また、景観は見た目だけが重要なのではないとし、この考え方は文化的景観の理解にも不可欠であると説く。まず、文化財保護法の条文を引きながら、文化的景観の価値は「自然や歴史、それから生活・生業といった多面的な視点から地域を総合的にとらえることで浮かび上がる」と指摘する(108頁)。さらに、陶器を作る陶芸家の手を例にして、文化的景観の評価にあたっては、見た目(=陶芸家の節くれだった手)だけでなく、目に見えない要素や歴史の重み(=手に刻まれた修行の跡等)を加味する必要があると説明する。その際、周囲にある他の要素と一緒に見ていくことで地域全体が分かる、そのような読み解き方がポイントであると解説している。

第6章以降では、重要文化的景観に選定された地域の事例から、地域の個性の読み解き方を紹介する。取り上げた事例は、愛媛県北宇和郡松野町の「奥内の棚田及び農山村景観」(第6章)、天橋立(第7章)、滋賀県米原市の「東草野の山村景観」(第8章)である。奥内地区では、棚田が広がる美しい「見た目」と、その背後にある水の恵み、地域住民の信仰、食、生物相、これらのバランスの観点から、地域の価値を総合的に理解する。続く天橋立については、既に第4章で古代の府中地区に触れているため、近世から近代を中心に天橋立そのものと先端側の集落である文殊地区を取り上げる。そして、絵葉書や吉田初三郎の鳥瞰図等から公園化やレジャー施設の設置といった動向を確認するとともに、白砂青松の世界が存続の危機にある現状を紹介する。さらに、東草野地区では雪と交通・交流という観点から地域の特徴を把握するとともに、集落の道路脇や屋敷地内で水路や湧水を使って水を溜めるイケ・カワトと呼ばれる施設について、他地域との比較を織り交ぜながら紹介する。

いずれも、著者やゼミ生らの丹念な調査成果が反映された豊かな内容を有している。しかし、本書の趣旨が、単に地域の個性を描き出すことだけでないのは、既に確認してきたとおりである。すなわち、本書の大きな目的は、景観や地域の個性を読み解く歴史地理学のアプローチを紹介する点にある。その目的に即して著者は、これらの事例を通じて、文化的景観は「個性が強いだけでなく、日本の生活や生業を例証しているという一般性も必要」であるとして、読者に注意を促している(212頁)。そして、本書で取り上げた重要文化的景観の事例は、それぞれ棚田景観、海辺の観光地、雪深い山村景観の代表例として、その他の地域を読み解く際の見方を提供しているとまとめている。

以上のとおり、本書は、豊富な事例を通じて歴史地理学のアプローチを紹介することに成功している。本書に接し、評者は2つの観点から大きな示唆を受けた。第1に、「伝え方のノウハウ」である。評者は、神奈川県立歴史博物館に現代史担当の学芸員として勤務している。学芸員の仕事は、資料の収集、調査・研究、教育・普及という大きな柱で構成されている。学芸員が成果を展覧

会等の場で公表する際に肝要なのが、伝える技術である。調査・研究の質が問われるのは当然ながら、広く、分かりやすく伝える技術が求められる。この分かりやすさは、時として単純で一面的な理解を生む危険性を持っている。本書では、単純な分かりやすさに陥らないよう、総合的に「全体を見渡す」姿勢が貫かれている。また、景観イメージや風景観について記したコラムを通じてステレオタイプからの脱却を呼び掛けているのも、通底した姿勢である。なお、「全体を見渡す」姿勢に関連していえば、本書に取り上げられた事例は西日本に偏在している。そのため、より幅広い範囲から事例が提示されれば、読者の関心をさらに集めるように思われた。もちろん、本書は事例の紹介に主眼を置いたものではなく、著者は、本書で示した方法をその他の地域に応用するよう読者に促している。よって、本書の趣旨に照らせば、対象地域のバリエーションを増やしてさらなる読者の関心を喚起することは、別の機会に求められるべきであろう。この点は、評者を含め、本書に取り上げられなかった地域にフィールドを持つ者に托された課題ととらえたい。

第2に、評者は、歴史地理学が博物館等の文化財行政の現場に貢献しうることを改めて確信した。本書の後半で取り上げられた文化的景観の話題は、著者が文化的景観の調査や検討に数多く携わり、歴史地理学の貢献可能性を発信してきた実践の成果にほかならない。本書に詳しく触れられているとおり、文化財保護法では、2005年に文

化的景観が文化財として位置付けられるようになった。また、最近では、地域における文化財の計画的な保存・活用の促進等を図るための法改正(2019年施行)や、無形文化財と無形民俗文化財の登録制度の新設を目指す動き(2021年閣議決定)がある。文化財の保存から活用へ重心を移そうとする方針には議論があるが、かかる動向に対して、歴史地理学分野はいかに関与していけるのかという問題を、本書は提起しているように思われる。博物館において、地図資料を専門的に扱う歴史地理学分野の出身者が活躍していることはいうまでもない。地図資料(=モノ)は、文化財としての位置づけが既に確立され、博物館での取扱い方に一定の道筋が提示されている。一方で、文化的景観は、新たに文化財と位置付けられた存在である。文化財の枠組みが拡大していく現今の状況を踏まえれば、博物館等の文化財行政の現場において、文化的景観を取扱う歴史地理学の専門家が活躍する機会は、より増えていくものと想定される。著者は、「景観の歴史を考えることは、単に後ろを振り返るだけではなく、前に進むべき道筋を見つけるための作業でもある」と述べている(171頁)。本書は、歴史地理学という分野が「前に進むべき道筋」をも提示しているように思われる。

上述の2点は、あくまで評者の関心に基づく理解であり、本書の意義はそこだけに集約されるものではない。幅広い関心のもとで本書が広く読まれるよう願っている。

(武田周一郎)